

綴方教室

恩師 吉沢（旧姓田中）真

昭和四年九月軍隊を出ると、すぐ、甲州の山奥の職員数七名という小さな小学校の教員となった。満二十才であった。赴任の日に、村役場で私の歓迎会をしてくれた。学校側七名、役場側村長以下数名列席のもとで、茶碗酒、いわしの丸干の料理で盛大に行なわれた。

席上、和服着流しの村長から「君は今後毎日朝五時から七時まで青年達に軍事教練を教え、八時より五時まで小学校の勤務、午後七時より十時まで青年学校の夜学指導、本村は新進気鋭の君を迎え成果のあがるのを期待する」旨申し渡された。

青年教師の私は、激務をものとせず、当時世界的な経済不況下で、山村の学校の月給不払（就職して八ヶ月間無給、月給四十五円）にも屈せず、師範学校時代「教員は聖職に従事する人間だ」と教え込まれた私は、聖なる教育道に情熱を燃やして教員生活のスタートを切った。

貧乏村の子供達。欠食児童が多く、朝と夜は大麦と野菜のごっちゃ煮が常食であった。昼飯にさつまいもを二、三本食べる子供はよいほうであった。油じみた着物でノー

パンツの男の子達、しらみのわいておる女の子達、でも眼をじっと見ておると精気こそないが、純真素朴な瞳の子供。可愛くて、いとしくてたまらなかった。

当時英語が好きだった私は、辞書と首っ引きで毎日夜更けまで、英語の小説や詩を勉強した。そのうちにドイツ語講座六巻を取りよせ、早くハイネやゲーテの詩を原語で理解したいと、ドイツ語の猛勉強も始めた。疲れると下宿の一室を出て、月見草の咲く谷川のせゝらぎに、ほのかな月の光に、薄墨色の山影に思いを寄せて诗情に酔い、また心を励ましたものであった。

山奥の学校に一年半在職すると、七人の教員定数が五人に減員された。月給は一分未払であった。貧乏村のために一年分寄附した。同時に、私は強制的に近くの大月の小学校に転任させられた。手がけた子供達や青年男女と別れるのがつらくてたまらなかつた。離任式のあと学校の同僚、子供達の代表、男女の青年達が村はずれまで見送ってくれた。別れ際に、ちり紙に十銭、二十銭、五十銭の銅貨を包んだ餞別をくれた。女性の手の柔いぬくみのあるのを生れて始めて知った。電車に乗る時みんな泣いてくれて、私もむせび泣いた。

山奥の村人は純朴で、礼儀深く、心から尊敬してくれた。「先生様」と言ってくれ

た。一生涯こゝにしがみついてと思つていたのに、不意の転任に心おさまらずして大月の小学校に赴任した。職員数二十名、軍事教練もなく、夜学の指導もなく、山奥の学校とは比較にならない町場の立派な学校であった。益々英語やドイツ語の勉強に熱中してロマンチズムの文学に憧れて来た私は、東京で勉強したい気持が心に芽ばえて来た。

父に上京の心情を打ちあげた。父も快く理解してくれた。当時、父の教え子が戸山小学校の校長・増田^{さし}先生であった。父から増田先生に愚息採用方の依頼状や、また父が上京してお願いのあと、増田先生より採用の御返事を賜わった。私のような山出しで、浅学菲才、寡聞固陋の人間を採用して下さったのは、父への義理であつたと沁々^{しみじみ}思つている。

昭和六年十月、増田先生に連れられて戸山小学校の門をくぐった。紹介されると、先生方が皆偉大に見え、子供達はえい智に溢れ、きびきびして、流石は都会だと私の心は萎縮してしまった。未熟な二十二才の私にとつては無理もないことであつた。教育者として、人格識見ともに卓越した増田先生には心から敬服し、他の先生方はこれもまた優秀で特質あり、色々な面で御指導を受けた。早く一人前になりたいと念願、努

力した。

戸山小学校二十二回卒業生の担任となつたのは偶然で、今ふりかえると私の小学校生活の最後であつた。

この頃は戸山小学校の生活にも慣れ、受験指導に追われたり、生徒達と野球やドッジボールをして遊んだり、三角山で走りまわつた。好きな綴方に自由奔放な指導、また好きなドイツ語の歌曲を生徒に押しつけて歌わせ、ウィーン少年合唱団の声を聞く気持になつて得意になつていたようだった。二十八才の頃だった。

小説論、作詩論、文学評論など高度の知識を手荒にも生徒達に教え込んだ。小説家、詩人、評論家、随筆家の小粒の卵が続出してたまらなく嬉しく、綴方の作品を抱え、自宅で夜の更けるのも知らず読み、赤ペンで批評を書くのに生き甲斐を感じた。生徒達ひとりひとりのかくれた力が月日を追つて現われ、表現も着想も魅力的になり、驚いてしまった。

「東京のどこの学校の生徒にも負けない作品ばかりだ」と言う独りよがりながら、自信を持った。

二十二回の生徒の卒業直前、私は新潟県の長岡商業高等学校に転任が内定していた。この子供達の綴方を永久に残したいと思い、「わが人生の歩み」と言う題の綴方を書か

せた。二十枚、三十枚、中には五、六十枚も原稿用紙に書き、思い思いの製本をして提出してくれた。家庭生活、子供ながら色々な人生の出合い、希望や悩み、争いや反抗、思い出など、随筆風に、小説風に、ドラマチックに表現されておつた。越後長岡の雪深い冬の夜、これらの作品から資料を抜き取り、「少年文学論」を夢みて本にしたいと私は想を練っていた。

長岡に三年いたが、雪国の生活にたえられなくて、再び東京の女学校に転任した。昭和十八年^{（一七八）}。戦争は苦境となり、空襲は激烈を増して来た。数百冊の文学書、山奥の学校で勉強した英語やドイツ語の本、ハイネやゲーテのレクラム本、それに六十数名の子供達の尊い作品を一夜の空襲で焼いてしまった。

「少年文学論」は徒労に帰してしまった。かえすがえすも残念至極であつた。でも、この度二十二回の生徒達が、再び童心にかえて機関誌「戸山が原」の発刊を計画するにおよび、私としては綴方教室が再現出来たような気持である。よいめぐり合せに遭遇したと感激でいっぱいである。全員が戸山小学校時代の純真無垢な気持に、折に触れ、時に接してかえることは、世俗にまみれた大人の心にこれぞないシチュエーションだと思ふ。

「戸山が原」を通じて、二十二回のOB達が母校の発展に側面から協力されんことを衷心から祈つてやまない。旧職員も「右にならえ」で私も、わが青春を燃やした戸山小学校に栄光あれと、今後微力ながら何かとつくりて行き度いと思う。

七十四才の老境ながら壮健、日本航空学園の理事を現在しておる。

（昭和五十七年・とやま第四集）

吉沢（旧姓田中）真先生

（昭和十一年 懐かしの写真帖より）

